

## 予防医学は世直し一揆！

みはらライフケアクリニック 三原 修一

昭和29年（1954年）、宮崎県北諸県郡山田町（現都城市）に生まれる。都城市立庄内小学校、私立日向学院中学・高校を卒業し、昭和49年（1974年）熊本大学医学部に入学した。医者になって、病で苦しんでいる人々のために働きたい、恵まれない人々のために働きたい。医者になることが、子供の頃からの夢だった。

昭和55年（1980年）、熊本大学を卒業し、長野県厚生連佐久総合病院へ外科研修医として赴任した。当時、ほとんどの卒業生が大学に残る時代、大学の医局に所属せず第一線病院に勤務する医師は非常に少なかった。大学の徒弟制度が自分にはなじまない気がしたし、何よりも早く技術を身に付けて第一線で活躍したかった。朝5時の病棟採血、救急外来、夜の病棟管理、人が嫌がる仕事も率先して引き受けた。膨大な手術をこなし、麻酔も333例行い、麻酔科標榜医まで取得した。超音波検査、内視鏡検査、漢方治療を覚え、診断から治療まで、ある程度はこなせるようになった。

さあこれから何をしようかと、夢が膨らんでいるときに、熊本からお迎えが来た。外科研修を終了し、3年目のことである。“熊本に帰って、健診をやろう。好きなようにやっていいから・・・みんなで応援するよ。”小山和作先生（現日赤熊本健康管理センター名誉所長）、二塚誠先生（現九州看護福祉大学長、当時熊本大学教授）らの誘いに負けた。外科医として今からという時、思い切ってメスを捨てた。“予防医学をやろう！”。進行癌が多く、手術してもむなしく亡くなっていく、そんな現実をたくさん経験した。誰かが予防医学をやらなくてはいけない。若い心は燃えた。

昭和58年（1983年）8月、日本赤十字社熊本健康管理センターに赴任した。最初の朝礼で言った。「日本一、世界一の健康管理センターを作りたい。予防医学の殿堂にした。」まずは、超音波検診に取り掛かった。普及するには、技師の養成が不可欠である。覚えの悪い(?)技師たちを真剣に怒った。素直な技師たちは、一生懸命ついてきてくれた。今では、ベテラン技師が後輩にしっかりと良い技術を教え込めるまでになった。超音波検診は、今まで早期発見できなかった肝胆膵腎癌、膀胱癌、乳癌などを発見できる画期的な検査である。一流の技術が必要である。人様の命がかかっているのだから、自覚を持って、死ぬ気で頑張ってもらわないと困るのである。“自分が受診者になったつもりで検査せよ！”“医者に教える技師になれ！”私の口癖である。今、技師たちは、その役目を立派に果たしている。当初は、上腹部臓器が対象であったが、下腹部臓器、乳腺、甲状腺へと対象臓器を拡大し、現在では頸部血管の健診も行っている。何でも見えるのが、超音波のすごいところであり、魅力である。

健診（検診）を普及するには、啓発活動が不可欠である。超音波検診では、結果説明会に全受診者を集めて講演した。各市町村を回り、2時間の講演を1日2～4回、年間150回以上の講演を続けた。夜は、町長さん、村長さん、保健師さんと一緒に酒を飲み、口説い

た。「超音波検診をすれば、住民が役場に集まるようになり、地域が活性化する。健康づくりの講演を私が引き受けるので、一緒に頑張りましょう。」彼らは言った。「よし！先生の情熱に負けた。やろう！」それから、急速に超音波検診は普及した。それだけでなく、他の健診も受診者が急増した。特に球磨郡では、全ての町村が超音波検診受診率90%を超した。某村では、検診受診しなかったのがたったの4人ということもあった。この30年間に、超音波検診受診者数は200万人を超え、発見された癌も2千例を超えた。皆が一丸となって燃えた結果である。

良い健診（検診）を行うには、徹底した事後管理も不可欠である。超音波検診を始めると同時に、事後管理システムの構築に取り掛かった。コンピューターもない時代、全くの手作業であった。夜中の1時、2時に帰ることもあった。保健師たちが、一緒に頑張ってくれた。やがて、コンピューターの時代となり、いまや年間30万人の事後管理を、しっかりと行っている。発見される癌症例も、年間400例を数えるが、その詳細を把握し生存率まで出せるようになってきている。私が赴任してから集計した癌症例はすでに7千例を超える。健診で発見された癌が早期癌か進行癌か、10年後、20年後に生存しているかどうか把握して分析することによって、初めて、我々の行ってきた健診が社会に役立つものであったかどうかが評価されるのである。健診とは、20年後、30年後にその真価を問われる息の長い、忍耐のいる仕事なのである。

超音波検診が軌道に乗ると、内視鏡検診に着手した。今からはもう、内視鏡の時代である。人間ドックに上部消化管内視鏡検査を導入し、検診、胃透視後の精査、外来での再検査・精査と拡大して行った。医師の確保は大変であったが、内視鏡6台、年間2万人の検査を行うまでに成長した。受診者数は25万人を超え、発見された胃癌、食道癌、十二指腸癌も600例を超えた。そのほとんどが早期癌であった。胃癌の原因として重要なピロリ菌検査や血清ペプシノゲン検査も導入し、その成績を分析した。外来では、1600例以上のピロリ菌の除菌治療も行った。大腸癌検診も、免疫便潜血検査に加えて、人間ドックではS状結腸内視鏡、さらには全大腸内視鏡検査を導入した。千例以上の大腸癌（そのほとんどが早期癌）を発見してきた。日本でもトップクラスの内視鏡検診を作り上げたと自負している。そのほかにも、PSA検診（前立腺癌検診）、胸部CT検診（肺癌検診）、マンモグラフィ検診（乳癌検診）など、いろいろな健診システムを導入した。

気が付けば、膨大な仕事をしてきた。学会発表も多いときは年間80題、医学論文も年間5～6編執筆していた。45歳にしてようやく学位（医学博士）を取得したが、提出した論文は45編（すべて筆頭著者）にもなり、熊大開学以来初と驚かれた。主論文は、13年間に超音波検診で発見された腎細胞癌についてまとめた。世界でも例がない多数例の分析であった。学位授与式で、江口吾郎学長からお褒めの言葉をいただいた。「学位を取るだけの論文が多い中、三原先生は忙しい仕事をこなしながら、13年間という長年の業績をまとめ上げて論文にされた。これこそ本当の医学博士である。

少々恥ずかしかったが、非常に嬉しかった。スタッフ全員でもらった学位論文、皆の長年の努力の結晶である。私は皆を代表してもらったに過ぎないが、健診の仕事で学位が取れたこと、母校の熊本大学で学位をいただいたことは誇りである。学位登録番号も777号で

あり、何か見えざる力を感じた。

学会活動も頑張った。演題発表や論文執筆だけでなく、多くの学会の評議員や世話人となり、厚生労働省の班会議にもたくさん参加してきた。健診で得た膨大なデータを分析し、数多くの新しい知見を提供してきた。いろいろな委員に任命され、論文査読や試験問題作成、がん登録など全国集計も行ってきた。また、熊本肝炎友の会を立ち上げ、15年間にわたって肝炎で悩む人々の支援を行った。九州予防医学研究会の発起人としても、その立ち上げと発展に寄与してきた。少なからず医学のため、社会のために貢献できたと思っている。

他の健診施設や海外の医療施設との姉妹提携も行った。中国ハルビン医科大学（現在、客員教授）、南京中医薬大学、山梨県厚生連健康管理センター、聖隷三方が原病院予防検診センター。お互いに交流しあうことで得るものも、また大きい。これからは、国際的視野に立つことも必要であると思っている。

私が日赤健康管理センターに在籍した28年の間に、健診（検診）のスタイルも大きく変わった。医学が進歩し、CT、MRI、PET-CTなど、最先端の医療機器も次々と導入された。健診の分野においても、さらに専門分化が進んでいくであろう。しかし、人のために尽くしたい、この世を少しでも良くしていきたいという“人としての心”を忘れてはいけない。ひいてはそれが、“予防医学の心”でもある。

平成23年（2011年）、日赤健康管理センターを退職し開業した。医者としての最後の力を振り絞って、もう一つ何かしてみよう、人生の集大成をしようと思ったからである。外科医として、そして健診医として培ってきたものを、人々に還元していきたい。自分の能力を、もう一度フルに発揮してみたい。老体にムチ打っての開業ではあるが、熱い心は失いたくない。神様が、三つ目の道を下さったと思っている。“もう一度、世のため、人のために頑張ってくれ！”と。

“みはらライフケアクリニック”にも、私の想いが込められている。ライフとは、命・生活・人生という意味がある。“命のケア”、すなわち病気の早期発見・早期治療、“生活のケア”：生活習慣を見直し病気の予防と早期回復を図る、そして“人生のケア”：心のケアも行い豊かな人生を送っていただきたい。すべて“予防医学の心”である。予防医学の真髄を、開業医として実践してみたい。

“一人でも多くの命を救いたい！一人でも多くの人を幸せにしたい！”私の医療の原点である。外科医であろうと、健診医であろうと、開業医であろうと、心は不変。私の、次の“世直し一揆”は、まだ始まったばかり。いつまでも、夢を追い続けていきたいのである。

（平成25年1月25日）